

1 ASMR音声作品 前日譚

2 『処女じゃなくてごめんね。俺とのエッチで余裕な彼女の性遍歴』

3 常世クラク

4 私のような女には、コーヒーは劇薬だ。

5 夢のような快楽への陶酔から、つまらない現実に関心を引き戻し。

6 自分が理性を持った一人の人間だということを意識させ。

7 忘れようとしていた罪悪感をも、無理矢理に思い出させる。

8 けれど激しいセックスで疲れた体は癒されたいと願い、この香ばしい味と香りを求める。
9 きっとコーヒーには、ある種の魔力のような何かがあるのかもしれない。

10 いつものラブホテル。その一室で、私は昼間に起きたあのことについて考えていた。

11 私を好きだと言ってくれた彼。

12 入社当時から励まし合ってきた同僚。

13 彼をいわゆる「そういう目」で見たことはなかった。

14 それでもあんな風に真摯な態度で好意を伝えられたら、私も真剣に考えざるを得ない。
15 でも私は釣り合うのだろうか？ あんなに真面目で、真っ白な人に……。

16 「あ、部長。おかえりなさい」

17 シャワーを浴び終えた部長は、カップの両端を両手で持ち、叱られた子供のように小さく
18 丸まっている私を見つめた。

19 それから私の肩をそっと抱き、寄り添ってくる。まるで私をあやすように。

20 このカップの温かみもいずれ冷めてしまう。

21 部長の私への興味も、そんな風に冷めてしまうのだろうか。

22 今まで私の横を通り過ぎていった男の人たちと同じように。

23 それが頭のどこかではわかっているというのに。

24 私は今そこにある体温に縋ってしまう。

25 飲みかけのカップをベッドサイドに置き、バスローブを脱いで部長と向き合う。

37 「んっ……。ちゅっ……」

38
39 ベッドに優しく押し倒されながら、唇を重ねる。

40 キスをするたびに私の中のカフェインは希釈されていく。

41 分厚い肉の重み。シワと脂に塗れた肌の感触。

42 そしてアルコールとタバコの混じった息の匂いが、私を犯す。

43
44 「ちゅっ、部長……。もっとしてください……」

45
46 腕を絡め、舌を絡め、脚でぐつと部長の腰を引き寄せて密着する。

47 今夜はもういい。すべて忘れてまた明日考えよう。

48
49 そう思った私の脳裏に、同僚の彼の顔が浮かんだ。

50
51 体はすでに部長のモノになっていた。心も快樂で埋め尽くされている。
52 なのに。

53
54 どうして彼の顔が浮かぶのだろう。

55 もしかすると彼なら。

56 私にずっと優しくしてくれた同僚の彼なら。

57 こんなにもいやらしい自分を受け入れてくれるかも。

58
59 いや違う。

60
61 私は私のありのままを、過去も今もひっくり返してすべて、受け入れて欲しいのか。
62 それはあまりに欲張りで、自分勝手な考えで……。

63
64 けれどそんな思考も一瞬のこと。

65 ベッドの軋む音が大きくなるたびに、私は快感の渦の中で曖昧になっていく。

66
67 朝目覚めた時。まだ意識がはっきりしていない頭で。

68 最初に思い浮かべるのが彼の顔であることを願いつつ。

69 私はまたまどろむように、快樂の中へと落ちていった。